保育・教科部会の成果と課題

1　はじめに

本年度は昨年度からに続き，学び合いを通した思考力・判断力・表現力の育成のためのよりよい授業の構想や教師のはたらきかけについて研究を深めた。その中でも，思考力・判断力・表現力を育て高めるために，学んだことをいかすことに焦点を当て，よりよい保育や授業の在り方を探った。保育・各教科においては学んだことをいかすとはどのような姿なのか，その姿が現れるためには何が大切なのか実践を重ねたが，その内容について本紀要において述べてきたところである。ここでは，それらの実践から考えられる成果や課題を挙げる。

2　思考力・判断力・表現力を育て高めるために
～　学んだことをいかすことに焦点を当てた保育や授業の在り方について　～

ここでは，研究総論の「**(3) 研究の実際**」に挙げられている①～④の４点を視点として，以下の四つの実践から考察していく。

まず，保育の実践「生き物を大切にしよう」においては，チョウやバッタを飼おうとする際に，単にケースに入れて飼うというだけでなく，元気な状態で飼いたい，大きくしたいという願いをもって飼育活動に取り組んだ。保育者がそのような子どもたちの願いをとらえ，クラスみんなで考える場をもったことが，個の願いが広がり，生き物をより大切に飼おうというクラスの考えにつながったといえよう。また，こうして複数の生き物を飼い，考える場を何度かもつことによって，次第に大切にしようという思いが高まった。経験がいかされて思いが高まっていったといえよう。ここには，主体的な学習者としての学びもあり，それがやがて自分のくらしへとつながっていく姿が期待できるであろう。

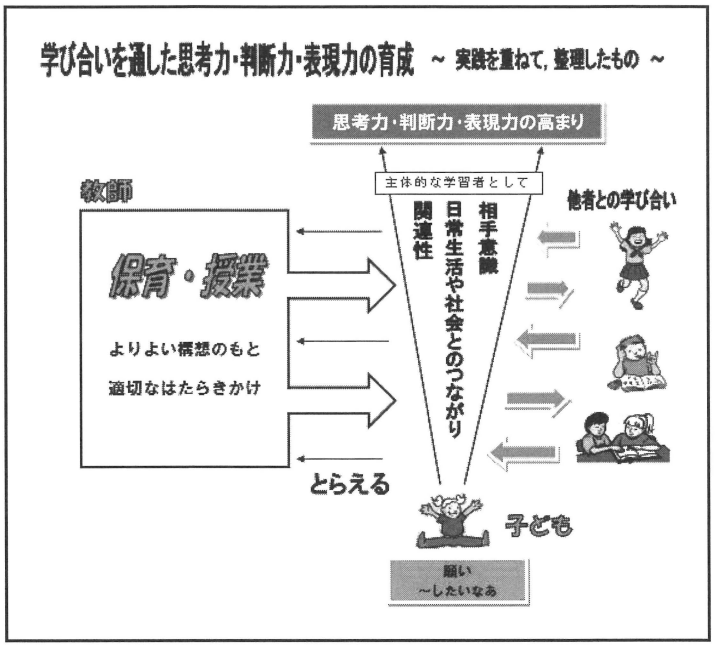
次に，小学校５年家庭科の実践「家でも作るぞ！おいしいゆで野菜サラダに挑戦」では，ゆでて調理する経験を３回積んだ後，学習したことを家庭でどのように実践できるか学び合う場面を設定した。そこでは，材料を工夫するという段階から，誰に作るかという相手意識をもたせるようなはたらきかけをすることによって，家庭の実態に応じた調理方法の工夫に目が向いていった。これはすなわち，本単元において学習したことを日常生活の中にある相手に合わせて，どのようにいかしていけばよいか，個々の高まりが見られた学び合いであったといえよう。

３点目として，小学校６年体育の実践「みんなでドリブル，パスからシュートにつなげよう～バスケットボール～」では，小学５年で学習した「ハーフコートバスケットボール」の学習とのつながりを重視した単元であった。ここでは，内容的にいかすことをねらうだけではなく，コートの使い方を考える，という学び方をいかすというつながりをもたせた。その結果子どもたちからは「広がる」「いろいろな部屋」といった学び合う際の言葉として自然と学んだことをいかす姿が表出した。こうして，子どもたちの中に蓄積されているものを，教師による授業構想によって自らいかして思考力・判断力・表現力を伸ばしていった。

４点目は，中学３年「平方根」の学習において，Ｂ５判，Ａ４判，Ｂ４判と三つの規格の紙の関係を考えた。この時に生徒が学習のふりかえりで「比例式など，今まで学習してきたことをいかすことが多かったですが，フル活用して取り組むことができ，自分で理解を深め，自分なりに考えたりすることができたので・・・」と述べている。拡大や縮小といった小学校やこれまでに学習してきたこと，紙を折ったり対角線の長さの比を考えたりして「ルート長方形」の秘密を探った単元内の学習など，学んできたことをまさに「フル活用」して考える姿が表れている。これまでに学んだことを関連付けて考え，自分の考えをレポートに書くことによって

より確かなものにしていくことができた。

以上のように，実践を四つ取り上げ，その成果を中心に述べた。これらから，総論における①～④の四つの視点に挙げたことは，学習プロセスを通して互いに密接に関連し合いながら，学んだことをいかす姿として子どもたちに表れ，思考力・判断力・表現力の育成につながっていくことが見えてきた。それを図示したものが右の図である。保育の実践にあるように，子どもたちには願いがあり，それが主体的な学習者として高まる姿につながる。これは，家庭科の実践にあったように家族に対する願いが，学び合いによって思考力・判断力・表現力の高まりにつながるのであり，そのためには教師の授業構想やはたらきかけが鍵を握ることは言うまでもない。そして，これらを実現していくには，子どものとらえが必要不可欠である。前述の四つの実践をはじめとした各実践の成果と課題に表れているが，目の前の子どもたちにとって必要なことは何で，何をどのように子どもたちに出会わせていくのか，といった子どものとらえ，つけたい力に基づいた明確なねらいの設定が大切である。そのねらいに基づいてこそ，主体的な学習者としてこれまでの学びとの関連性，相手意識の高まりによる自らの思考力・判断力・表現力の高まり，日常生活や社会とのつながりの自覚，すなわち学びをいかす姿が表出するといえるであろう。



以上のように，今年度の成果として，実践を重ねることによって学びをいかすための子どもの高まりの在り方と教師の役割が明らかになってきた。また，これは同時に新たな課題が見えたことでもある。教師はどのようなねらいをもち，どんな授業を構想していくのか，それによってどのように子どもの願いを高めていくのか，さらなる研究の余地があると言えよう。

3　おわりに

今年度は，一貫教育のグランドデザインのもと，保育・授業研究や子どもの絆づくりを行う，という本学校園における一貫教育の在り方を整理した。これは，これまでどちらかと言えば教師が構想した枠組みの中で子どもたちにどのような学びをつくっていくか，という視点から，「学びを拓く」という言葉があらわすように，子どもたちが自ら学びをつくりあげていく，という視点への転換期における一つの成果であったと言える。本稿では保育・授業の在り方について主に考察を進めたが，学びをいかすことに焦点を当て，子どもたち一人一人が思考力・判断力・表現力を高め，自らの学びを拓いていく姿を求めていくためには，さらなる研究が必要であることと結論付けたい。これを私たち自身が自覚し，前進していくためにも，学んだことへの評価を大切にしていくことがさらに必要であるといえる。今年度は特に本時の取組について評価の在り方について考えた。今後は子どもたちの姿をより具体的にとらえ，学びを拓く子どもの育成に努めていくためにも，よりよい評価の在り方とはどのようなものか研究を進めていきたい。

（文責　喜多川　昭博）